

# 立ち止まって考える教育と「幸せ」



日本における「勝ち組」の先に、幸せはあるのだろうか？  
2015年、クリスマスの日に過労から自らの命を絶つた高橋まつりさん。彼女の死は、私たちに今なお問いかける。私たちは何のために働くのか？

「人間はお金を稼ぐために健康を犠牲にし、今度は健康を取り戻すためにお金を差し出す。そして未来を心配し過ぎて現在を楽しまない。結果として、人は現在も未来も生きないのだ。いつ訪れるかもしれない死を忘れて生き、真に生きることなく死んでいくのだ」

教育についても同じことが言えるのではないかと。アメリカを代表する教育哲学者のジョン・デューイは言う。「教育とは人生の準備でなく、人生そのもの」。日本の教育はどうだろうか。小



すずき・だいゆう 11973年、千葉市出身。99年米国立タンフォード大学院修了。2002年から6年半、千葉市の公立中学で英語教諭として勤務した後、市場型教育改革について学ぼうと再渡米。フルブライト奨学生としてコロンビア大学院博士課程に入学。2016年に人口4千人弱の高知県土佐郡土佐町に家族で移住。19年4月、同町議会議員選挙でトップ当選。教育を通して町おこしに取り組み。著書の『崩壊するアメリカの公教育 日本への警告』（岩波書店）は10刷を重ねる。

## 教育研究者・土佐町議会議員 鈴木 大裕

学校の勉強は中学校のため、中学校は高校受験のため、高校は大学受験のため、大学は就職のため…。日本の子どもは、真に学ぶことなく大人になつていくのではないだろうか？ 子どもたちの勉強に、学ぶ喜びはあるのだろうか？

### 教育が維持する「格差社会」

私は両親に無理を言つて16歳の時にアメリカに留学した。いま思えば、日本の社会に不満を感じていたのだ。自分なりに頑張つて第一志望の高校に入り、東京での自由な高校生活も手に入れた。これで新たな景色が開けるのかと思つたら、先の景色もこれま

で見えない中、萩生田文科相は先日、4月16日に予定された今年度の全国学力調査、そして定期考査…。地方自治体や学校が威信をかけて点数を競い合う中で、子どもたちはテストの答え探しに明け暮れ、大人たちが築いてきたこの格差社会を「生き抜く力」を身に付け、必死に適応しようとしている。そうしてこの息苦しい格差社会は、子どもたちの教育を通して維持されていくのだ。

全国学力調査を抽出式に

昨年12月、我が土佐町議会は、悉皆式(全国の小6と中3を対象とする全員参加形式)で行われている全国学力調査を抽出式に変更することを求め、意見を全国で初めて採択した。全国学力調査がその名の通り「調査」ならば、先に幸せがないのであれば、そんな成功もいらない。歯止めがかからない不登校児童や精神疾患を患う教員の増加は、学ぶ喜びや新しい社会を想像する機能を奪われた学校での息苦しい生活を強いられる子どもや教員からのSOSに違いない。いま求められているのは、一度立ち止まり、教育を通して社会のあり方そのものを問い直すという作業なのではないだろうか。

と何ら変わらなかつた。そもそも、何のための教育なのだろうか。私たちは子どもたちにどんな未来を生きてほしいのか。このような根源的な議論もいまま、地方自治体や学校が点数競争に邁進している日本の教育体制を恐ろしく思つるのは私だけだろうか。本来、教育と権力との間には切っても切れない関係がある。しかし、「学力向上」という巧妙に中性化され、空っぽなスローガンが、私たち急に焦りが募つた。

留学先で、人生を変える出会いに恵まれた。ウォーカーが排除されているのだろう。彼の授業では教科書ではなく、大人も読むような文学とが許されて本当に良いもの

使った。何週間もかけて1冊の本と向き合い、一つのシーンについて皆で話し合い、作者が選んだ言葉の意味を考え、作者が見た光景に想いを寄せた。ウォーカー先生の気迫のせい、彼の教室で繰り広げられる学びほど重要なこととはこの世にないと私は思っていた。学ぶことは生きること。そう教えてくれたのは彼だった。

「夢」というのは若者に許さず、就職までの執行猶予のある。しかし、「学力向上」ままだでは自分はユニークな存在になれない…。そう思つて、にその関係を見えにくくしている。そもそも何が「学力」に含まれ、その定義から何が排除されているのだろうか。たった2、3教科で子どもを学校を評価するようなことを許されて本当に良いもの